

迷宮と精霊の 王国 4

*The kingdom of
labyrinth and spirits*

Tounosawa Keiichi
塔ノ沢 溪一

アルダ

エレストリア王国の武官で、大隊長。あまり人の話を聞かない性格。

シャノン

エレストリア王国の王女。人前では猫をかぶっている。

クロエ

カエデの使い魔として召喚された大地の精霊。カエデに熱烈な好意を持っている。

サーリア

凄腕の魔術師。強気な性格だが、周囲の人間に振り回されがち。

リリー

黒猫に宿った精霊で、アメリアの使い魔。口は悪いが、根は優しい。

アメリア

ハーフエルフの少女。人と関わらないように生きてきたせいか、色々と初心。

ルーファウス

エレストリア王国の武官、兵団の一番隊長。重度のロリコン。

アニー

エレストリア王国の武官にして、副大隊長。戦闘力はないが、妖しい術を使う。

エド

莫大な魔力を持つ少年。漁師になって金持ちになるのが夢。

一葉楓

神様に同情されて異世界に転生した男。普段からぼんやりしている。



1

魔物に襲われて危機にあるカースイユの砦を救うために、俺——一葉楓は、仲間たちとともにその砦を目指していた——

カースイユ地区で野営を始めてから四日が過ぎた。同じ地区に入ったとはいえ、砦に行くには魔物の数が多すぎた。

最初の魔物掃討作戦はどうか上手くいったものの、そこで予想以上の大物が現れてしまい、以降の作戦が行き詰まりを見せている。

カースイユの砦は疲弊しきつていて、すぐにでも救助に向かわなければいけない状況だ。

しかし、この二日間作戦会議しかしていなかった。

「大体よ、『倒しました』なんつう冴えねえ報告だけ聞いて作戦を決めようつてのが、無理な話なんだよ。作戦なんてどうでもいいから、さっさと覚悟を決めて敵を倒しに行こうや。なにを縮こまらなければならないってんだ」

隊長バリーの精霊で、犬の姿をしたガスの意見に、大隊長アルダの精霊で、こちらはネズミの

ジャックが飛び上がった。

「バカ野郎！ アレを見てねえお前にはわかんねえんだよ。最上位の魔物が現れたんだぞ。俺たちはな、そんなのと戦ってきたんだ。もし次に、あんなものが現れたら、俺たちや全滅だぞ」

「だけど、そいつあ、そこにいる間抜け^{くづ}面^{めん}が倒したって話じゃねえのか。だったら次もそいつが倒すだろうよ。大体、そんなもんがたくさんいるわけねえんだ。だから、とりあえず小さいのからでも倒していかなくや、作戦が進みやしねえじゃねえかよ。おめえも骨の髄^{ずい}までビビっちまってやるな。情けねえつたらねえや。この、しみつたれが」

その言葉に逆上したジャックが、ガスの眉間^{みけん}に飛びついて思い切り噛^かみついた。

ガスは悲鳴を上げて、転びまわりながら作戦会議の開かれているテントから出ていった。

おーいってえ、こうなりや遊びじゃねえ、という悲鳴にも似たガスの声を遠くに聞きつつ、テントの中で地図を囲んだ一同は、途方に暮れた顔を並べていた。

「ガスの言うとおり、作戦を続けるなら、あれほど高位の魔物は出てこないと楽観的になるしかないな。そうでもないと身動きの取りようがない」

そう言って話を切り出したのはアルダだ。

俺たちが、撃退したとはいえ、人型の魔物と遭遇^{そうぐう}した旨を報告したために、みんなの間にはかなりの動揺が広がっている。

魔物はルーファウスの魔法に耐え、さらには俺とアルダの二人がかりで倒したことになる。そうなると、よっぽど運がよくない限り、次は全滅だと考えても無理はない。

ゆえに作戦の立てようがなく、次の行動に移れないのだ。

俺ならば倒せるだろうが、禁呪を使わずに倒す自信はない。だから、迂闊^{うかつ}なことを口にして、みんなの前で戦うなんて事態になるのは避けたい。

「それとも、他に考えのある者はいるか」

「アルダとカエデを中心に置いて、その周りで、魔物を討伐するしかないんじゃないですかね。ワープゲートで移動できる範囲に兵士を展開して、大物が出たら大隊長とカエデが出ていって倒すんですよ」

副大隊長なる肩書きを持つアニーの言葉に、アルダが頷^{うなづ}いた。

「確かにそれしかない。だが、私は対人戦に特化していて、魔物との戦いでは大して役に立たないだろう。よって、カエデを中心に据えて、いざというときに戦ってもらうことにする。私は一隊を率いて討伐に当たろう。もし大物が現れたときは、大声を上げて知らせるんだ。ちゃんと偵察^{ていさつ}を済ませてから前進するようにするんだぞ。暗殺部隊の連中がその役目を願^{ねが}い出ているから、彼らに任せればいい。それだけで、かなりの危険を減らせるはずだ。各隊に配置するので、お前たちが好きに使ってくれていいから、そいつらにもしっか手はずを伝えるんだ」

「あいつらにそんなことができますかね。討伐の終わっていない場所はかなり危険ですよ」
バリーが素朴な疑問を口にする。

周りの森は魔物だらけで、見つからずに移動する術など普通ならない。
だが危険を減らすには、かなり広い範囲の状況がわからないと意味がなかった。
「どうだろうな」

そこはアルダも疑問があるらしく、はかりかねるといった様子で首を傾げた。
暗殺部隊は秘密主義が過ぎて、どんな能力を持っているのか誰も知らないのだ。

名前こそ仰々しいものの、魔物と戦う術はほとんど持ち合わせていない——アルダによれば、向こうからそう言っているらしい。

しかし、移動術には長けているので、斥候のようなことならできると申し出があったという。
そんな訳のわからない連中に命を預けるなんてどうかしているが、それだけ手詰まりなのだ。
下手に魔物討伐の役割を与えられてしまったままないと、苦し紛れでそんなことを言い出した可能性もある。

「魔物に化ける魔法でもあるんですかねえ。そういった魔法は聞いたことがありませんけど。あ、空を飛ぶ精霊の力でも借りるっていうならわかりますけどね」

まるで緊張感のない声で隊長の一人、ルーファウスが言った。

この作戦に多くの命がかかっている自覚があるのか疑問に感じる口調だった。

本当に、何が起きてもマイペースを崩すことがない男だ。

「ま、様子を見ればいいだろ。得体のしれないもんに期待するのは危険だからな。ダメそうなら、また新しい作戦を立てるだけさ」

確かに、バリーの言うとおり、一度やらせてみないとわからない。

意見が出揃って、アルダが一同を見回しながら言った。

「何か質問はあるか？」

アルダの言葉に、アニーが不審そうな眼差しを俺に向ける。

俺一人で大物に対処するという部分に、納得がいかないようだった。

だが実際に、あのレベルの魔物を相手にできるのは俺しかない。

アルダの攻撃力では魔物に傷をつけることすら難しいし、バリーではダメージを与えられても相手の動きについていくことができない。

特にバリーの動きは直線的すぎるくらいがあるし、ガスを背負っている分のハンデも大きい。

「質問がないようなら、とりあえずこの作戦でやってみよう」

ようやく、作戦の大まかなところが決まった。

それとは別に、俺は大物を倒す算段を整えておかねばならない。

作戦として戦うので、邪魔が入る心配はしなくてもよさそうだ。

しかし、禁呪のルシファフレアとロアフレイムを見せずに倒す必要がある。というか、最初からそうするより他にないのだから、俺が今できるのはその覚悟を決めることくらいだろう。

アルダたちが作戦の細かいところを詰めはじめたので、俺はひとりでテントの外に出た。テントから出たところで、ガスとジャックに出くわした。

「いくら大隊長の精霊だって、ここまでやられちゃ、こっちも引つ込めねえや。これに懲りたら、あまり威張り散らせねえことだな。自業自得ってものだ。なあ、おめえもそう思うだろう」

額から血を流し、前足でジャックを地面に押さえつけているガスが言った。

どうやらさっきの喧嘩は、ウエイトの差に物を言わせたガスが勝利を収めたようである。

土佐犬のようなでかい犬と、その足の先ほどしかないネズミの戦いなことから、まあそうなるだろう。

それでもガスの体は、ところどころ毛が焦げて黒くなり、嫌な臭いがする。

「まあた寝ばけたような顔しやがって。嫌になっちまうなあ。おめえに話しかけても張り合いがねえや。もう少し気を引き締めて生きたらどうだよ」

そう言っ、ガスはジャックを口に咥え、テントの中へと戻っていった。

ああいうのに比べれば、俺の精霊——かつてはルシファアと呼ばれ、今はそれを隠すためにルー

シと名乗っている——は静かなだけマシな部類かなと思えた。

欠点があるとすれば、シリコンのような感触をしているから、力が逃げてしまい手で持ちにくいことと、かなり熱を奪う素材でできているから、隣で寝ていると体温を奪われて、起きたら体が衰弱していたりすることがあるくらいだろうか。

今も、ルーシの入っているポケットはひんやりと冷たかった。

あと、ずつしりと重いのも難点であるかもしれない。

俺が木陰で休んでいると、作戦会議を終えたルーファウスがやってきて、隣に腰を下ろした。

「作戦は結局、どういうところに落ち着いたんだ」

「しばらくは日歸りで、この辺り一帯を掃除することが決まったよ。集団で移動して、カエデはその中心で、お荷物のアニーと一緒に待機だね。今日の午後から、練習を兼ねて始めてみるってさ。こんな森、僕に任せてくれたら簡単に平地にしてみせるのになあ」

ルーファウスはいつもと変わらない様子で草の上に寝転んだ。

それにしても、あんなふうに自然に対する大破壊を喜んでやるのは感心しない。

しばらくしてアニーもやってきた。

「アルダはちよつと、アンタのことを買いかぶりすぎじゃないかしらね」

現れた早々、俺たちを見下ろしながらそんなことを言い出す。

「そんなことないさ。アルダはちゃんとわかってるよ」

ルーファウスの言葉にも、アニーの不満は解消した様子がなかった。

二度ほど近くで俺の戦いを見たことのあるルーファウスは、何も心配していない。

アニーは訝しげな目で俺を見ながら言った。

「で、まだ詳しく聞いてなかったけど、アンタは領地に籠^{こも}って何をやってたのよ。何か希望のある話でもないわけ？」

そういえば、こいつにはまだ詳しく話したことがなかった。

まあ、詳しいも何も、はっきり言えば、成果はなかったに等しい。

だから、また色々と言われることになるだろうなと思えて、なかなか話してやる気になれないのだ。

俺は少しだけ迷ってから、仕方なく口を開いた。

「仕事も順調に増えているし、生産性もあがってるよ。冒険者も増えてきて、どんどん力をつけているから、迷宮の運営も順調だ。今回の討伐には間に合わなかったけどな。この辺りでは、これからも持続的に戦える力を必要とするはずだから、無駄にはならないんだぜ。そのうち素質のある奴が、頭角を現してくるんじゃないか」

そんなことを話したら、アニーはあからさまにがっかりしたような顔をする。

これ見よがしに、わざわざ大きなため息までついてみせた。

「そんなことだろうと思っただわ。結局、口ばかりじゃない。アンタに期待した私が馬鹿だったわ」

「そう馬鹿にした話でもないと思うよ。貴族のあいだでも、カエデの領地——ウルサルは最近かなり注目されてるんだ。この先、一番儲^{もつ}かる土地になるかもしれないってね」

庇^{ひた}い立てするルーファウスの言葉に、アニーは眉^{まゆ}を吊り上げた。

「今日明日にも死ぬかもしれないのに、そんな先のこと心配してどうすんのよ！　いくら儲^{もつ}かってても、死んだらそれまでじゃない！　隊長連中は頼りないし、アルダまで魔物退治は得意じゃないって弱気になってるし、それでもカエデには多少の期待はしてたのよ。正直、がっかりだわ」

怒りを爆発させたアニーはすごい剣幕である。

王城で姫さまのように暮らしてたのに、戦えもしない身で戦場に引つ張りだされて、自分一人で作戦をまとめなければならないと気負っているらしい。

確かに、作戦会議もガスやジャックに引つ掻^かき回されるだけで、アニー以外からはアイデアの一つも出ていなかった。

こいつにも思うところがあるようだ。

それにしても、これからずっとこんな愚痴^{ぐち}を聞かされ続けるのだろうか。

今日からは一緒に待機することになるのだから、それだけは勘弁願いたい。

俺はアニーを落ち着かせようとして言った。

「そんなに心配しなくたって、俺が全部倒してやるから安心しろよ。ドラゴンだって倒してみせた。それにゼニスゴーレムだって倒したんだぜ。お前はふんぞり返って、お山の大将でございと俺の活躍を見ていればいいんだ。お前のヒステリーを聞いていると、神経がやられて戦う気力が萎えそうなんだよ」

「どこからそんな無責任な自信が湧いてくるのかしらね。それにお山の大将とは何よ。私は副隊長長のよ。アンタらよりも、よっぽど偉いんだから」

「カエデにはルシファアの力があるじゃないか。それはアニーも知っているだろう」
突然のルーファウスの言葉に俺はぎよつとした。

そんなことまで話してしまつてどうするのだと思つたが、そういえばアニーも、俺がルーシと契約するところに居合わせていたのだ。

アニーは口を半開きにした間抜けな顔で、俺の顔を眺めている。

「そういうことだ」

俺は短くルーファウスの言葉を肯定した。

「それにカエデは、剣の腕だつて大隊長にも勝てるほどじゃないか。なにを心配することがあるっ

て言うのさ」

「で、でも、そんなことが知れ渡つたら、カエデはこの国に住めなくなっちゃうじゃない。アルダたちには、そのことはまだ話してないんでしよう。もしそんなことが王様の耳に入つたら……」

「今、私の噂話をしていなかったか」

アルダの声が響き、アニーは叫び声を上げて飛び上がった。

迷惑なことに、飛び上がったアニーは膝を曲げて、寝っころがっている俺の上に着地したものだから、俺は腹から空気が絞り出されて、痛みと苦しさでのたうち回った。

「悪口でも言っていたか。遊んでないで、さっさと準備をすめるんだ。昼飯を食べたらすぐにも作戦を始めるぞ。それとアニー、そいつは今回の作戦の重要な柱だから、作戦前にあまりいじめてやるな」

その言葉を聞いて、アニーは俺の上から飛び退いた。

アルダはルーファウスに用があつたらしく、お前は緊張感がないぞなどと言いながら、どこぞへと連れていった。

俺はいまだに放心している根暗少女を放っておいて、食事をとつてから自分のテントへと戻った。そして装備を点検し、それぞれを身に着ける。

アルダやバリーなどは野営地でも鎧を着たままでいるが、俺は自分の異空間——“ボール”の中

に放り込んだままにしていた。

いくら高級品で軽いと言っても、普段着にするには重すぎる。

鎧を身に着け終わったら、自分のテントを出て集合場所に向かった。

すでに多くの兵士が集まり、三隊に分かれて隊列を作っていた。

しばらくするとアルダがやってきて、出発の号令をかけた。

2

野営地を出てから三十分もしないうちに、周りでは戦いの音が聞こえはじめる。

俺は一番後ろで待機していた。

その俺から見て、前に一つと左右に一ずつ、計三隊が展開していた。

叫び声などなくても、いつでも駆けつけられるだろうという距離だった。

「こんなに多くの兵士が見てる前で、間違ってもルーシの力なんか使うんじゃないわよ。それで、アンタはどうやって戦うつもりなのよ」

隣を歩いていたアニーが、俺のことを見上げながら言った。

俺たちはふたりきりで一番後ろを歩いている。

周りには誰もおらず、俺たちのちよつと前に、馬に乗って王家の旗を掲げた兵士がいた。

「さあなあ。なんとか遠くに離れて戦うしかないんじゃないか。どっちにしても熱量が凄^すいから、周りに兵士がいるような状況じゃ使えない魔法だな」

「はあ、アンタやルーファウスを見ると、真剣な自分が馬鹿らしくなってくるわ」

「お前も大変だな。戦えもしないのに、どうして連れてこられてんだ」

俺の言葉に、アニーはちよつと気まずそうな表情を浮かべた。

「アンタは、あの三人に任せておいて、手放して安心できるわけ？」

あの三人とは、アルダとバリーとルーファウスのことだろう。

俺はなるほどと言って頷いた。

「それと、私は魔法が使えるようになったのよ。あまり侮^{あなづ}らないでくれないかしら。最近では中級魔法も覚えはじめて、立派な戦力なのよ」

憤慨^{ふんがい}するアニーの言葉を、俺ははいはいと受け流した。

今さら、実戦で使ったこともない中級魔法などなんになるのだと思うが、顔には出さないでいた。

だが、あの三人に任せておくのは、さすがにやけっぱちがすぎるというのはよくわかる。

ルーファウスはちよつと好戦的すぎるところがあるし、アルダは流されやすい上に、魔法や作戦といったことに無頓着だった。

そしてバリーに至つては何も考えていないだろう。

「それで、どんな魔法が使えるのよ。ルシファアの力つて具体的にはなんなの」

「伝説にあるだろ。大きな火の玉を落とすんだよ。ドラゴンですら耐えられないような熱量が出るんだぜ。あまり素早い奴にぶつけるのは至難の業^{わざ}だけだな」

「へー、凄^{すご}いじゃない。やつと希望が見えてきた気がするわ」

「そうだろ。だから、お前がそんなに思いつめて、ヒステリーを起こす必要なんかないんだ。大船^{おおふね}に乗ったつもりで、俺以外の奴に、いつも通り偉そうにしていってくれたらいいんだからな」

「伝説には、太陽ほどもある火の玉が降り注いで、空が真っ赤に染まったとあるけど、人間にそんなことができるのかしらね」

「俺じゃ五つも落としたらスッカスカカンだ。だけど威力だけは保証するぞ」

そんな話をしていたら、俺は背後にいる魔物の動きをとらえた。

数匹の魔物がすごいスピードでこちらに向かってきている。

「敵に回りこまれてるな。騒^{さわ}がしいから遠くからも集まってきたのかな」

「ど、どうしてそんなことがわかるのよ。ああ、そんな魔法が使えるんだっけ」

「俺が倒すから、お前は動かずにじっとしてろよ」

アニーは緊張した表情で、どもりながらも了解と言った。

敵の数は三体、迷宮にいた狼型の魔物——ディアウルフだ。

かなり大きな魔物で、犬くらしいしかないレッサーウルフとはまったくの別物である。

迷宮のかなり深いところを出る魔物である。

ディアウルフは現れるなり三方に広がって、真ん中の一匹が俺めがけて突っ込んできた。

ここを通してしまったら大変なことになるので、俺は仕方なくロアフレ임을左右の二体に向けて放つ。

それが両方とも命中したのを確認して、正面の一体に向き直った。

敵はすぐ目の前まで迫っている。

アニーが叫^{さけ}び声を上げているが、気にせず俺は腰の刀を抜き放ち、ディアウルフを斬った。

胴体が真っ二つに裂けて、すぐさま塵^{ちり}となって空に舞う。

そして、炎に巻かれてのたうっている二体にとどめを刺した。

二体とも無事に塵^{ちり}となって、地面の上に積もる。

俺はその中から魔石を拾い上げて、アニーのもとに戻った。

アニーは叫^{さけ}び声を上げたことが恥^{はにか}ずかしかったのか、ふーんというような顔を俺に向けていた。



「いい叫^{さけ}び声だったな」

俺がそう言ったら、アニーはそっぽを向いて頬^{ほお}をふくらませた。

追い打ちをかけてやろうと、何を言おうか考えていたら、アニーが俺を睨^{にら}んだ。

「どうして自分に向かってくるやつから倒さないのよ。もうちょっと無難に戦った方がいいんじゃないの。そんなこともできないのね。無駄に心配させて——ああ、アンタの心配じゃなくて、私の心配をただけよ。この間抜けのせいで私も死ぬのかと思っただわ。ホントに無様^{がや}な戦い方をするわね」

俺は素人は黙つてろと言いたかったが、それよりも違うことが気になった。

「あれほど強い魔物が出るんじや、今、周りで戦ってる兵士たちは大丈夫なのか。あれは迷宮でもかなり深いところに出る魔物だぞ。あれが三体も一緒に出てきたら、そこら辺の冒険者じゃ太刀打ちできない」

「一人で簡単に倒してたじゃない」

いや、そうでもない。人前ではあまり使いたくなかった魔法を使ってしまったし、本当はマナも使わずに温存しておく手はずだったのだ。

これは前線の兵士たちも、かなり苦しい戦いを強いられているに違いない。

ちよつと無神経に進みすぎたのだろうか。

もう少し慎重に作戦を進めた方がいいとアルダに伝えるべきだろう。

そんなことを考えていたら、前線から傷ついた兵士たちが次々と運ばれてきた。

各隊に配置されている魔術師たちも、治療しながら怪我した兵士と一緒に下がってきている。

俺はマナを温存しておかなければならないのだが、その魔術師たちでは治せそうにない重傷者がいたために、仕方なく治療を手伝った。

人体の組成を知らない魔術師たちでは効率が悪いし、骨にまで達した怪我は治せない。

アニーも手を真っ赤に染めつつ、慣れない治癒の魔法を使っていた。

しかし、傷ついた兵士たちよりも問題なのは、刃がこぼれたり、穴の開いてしまった装備の方な気がした。

体はいくらでも魔法で治せるが、壊れてしまった装備品は直せない。せっかく体を治しても、戦いようがなくなってしまう。

傷ついた兵士には竜人族が多かった。戦闘力の高い彼らは、並大抵のことではこうならない。

かなり深刻な状況に陥っている隊があるようだ。

俺は治療を終えると、立ち上がって周りを確認した。

どうやら傷ついた兵士を後方に送っているのは、左側を任されていたバリーの隊であるようだった。

気がつかないうちに、ずいぶんと前線は離れてしまっていたらしい。

アルダやルーファウスがこの事態に気づいているとは思えなかった。

俺は、怪我を治した兵士たち三人に、すぐさま移動を止めるように隊長たちに伝えてくれと言いつづけた。

三人は前線に向かって走っていった。

伝令はすぐに届いたようで、隊の移動はまもなく止まった。

それに続いてアルダが血相を変えてやってきたので、バリーの隊が崩れかけている旨を伝える。

アルダはすぐに何人かの精鋭を連れて応援に向かった。

これで、とりあえずバリーの隊は大丈夫だろう。

俺は治療を終えた兵士たちを回って、違和感などが残っていないかと尋ねていった。

実は治療が上手くいっておらず、あとから急死なんて事態は困る。

伝令を聞いて、ルーファウスも負傷した兵士を連れてやってきた。

「酷い有様だね。これはバリーの隊から出た負傷者かい。僕の隊は森に入っているから、いつまでも待機させておけそうにない。薄暗くなってくる前に引き返さないと、森の中では足元が見えなくなり、身動きが取れなくなってしまうんだ」

しばらくして、アルダがバリーを連れて戻ってきた。

「俺の忠告を聞かねえから、おめえはそういうことになるんだよ。アルダにまで迷惑かけちまって、俺あ恥ずかしいよ。おめえが一人で突っ込んでいっちゃったら、他の奴らにどうしろってんだ。隊長待ってくださいって、健気けんげについてきた奴らが気の毒で見えられなかったぜ」

バリーの背中では、いつものごとくガスが愚痴ぐちっている。

「退却するぞ」

アルダがそう短く告げると、退却の笛ふえが鳴らされた。

それを聞いて、ルーファウスはホッとした顔を見せた。

この分だと、バリーの隊以外も負担は大きかったようである。

こうして俺たちは、なかば敗戦にも似た形でこの作戦の初日を終了させることとなった。

野営地に戻って点呼を済ませると、すぐさま会議の招集がかかった。

俺が中央テントに入れば、疲れた顔をした面々が既にそろってため息をついていた。

まずはアルダとルーファウス、続いてバリーが、今日の報告を始めた。

先頭を任されていたアルダは強い敵に当たることが多かったものの、率いてたのが精鋭の多い隊だったため、無事に倒せていたらしい。

ルーファウスの隊は右翼に展開し、森の中に半分入ったような形で進んでいたが、それほどの強敵には遭遇そうぐしていなかった。

これは、前の作戦で森の反対側を大規模に殲滅せんめつさせておいたからだろう。

問題は手付かずになっていた左側で、背の高い草の生えた草原が広がっているこの場所は、かなりの数の敵が残っていたようだ。

バリーの話では、戦いはじめた途端に敵が集まり出して、前線が孤立するほどの数に囲まれてしまったらしい。

突っ込みすぎたというのもあるだろうが、野営地から三キロも離れていない場所に、それほど魔物がいたということでもある。

戦死者こそ出してないが、装備はかなり消耗しょうこうしてしまっていた。

この作戦に何日掛けるのかは知らないが、補給なしに続けるのも限界がある。

「ここからカースイユの砦とりでまでは、どのくらいの距離が残ってる」

バリーの質問に、ルーファウスが答えた。

「馬で半日も走れば遠くに見えてくるんじゃないかな。でも、このままじゃ兵士たちも装備も、そう長くは持たない。となると取れる作戦は一つだと思いますが、どうですかね」

ルーファウスは思わせぶりの表情をアルダに向けた。

アルダはしぶしぶといった様子で頷うなずいた。

「草原の方も、お前の魔法で消し飛ばすしかないな。だが、あの作戦は綱渡りつなわたがすぎる。もう一度

うまくいく保証なんてどこにもないんだぞ。前回だって、成功したのが奇跡なんだ。もし、お前やカエデを失えば、この作戦だって終わりにしなきゃならなくなる」

「あんな何もないだっ広い場所で、あの数を相手に戦うなんて無茶だぜ。もう一度の魔法で片付くなら、それでいいじゃねえか」

ガスはすいぶん弱気になっていた。

朝はさつさと始めようと息巻いていたのに、今じゃジャックと変わらない様子だ。

さつきから、バリーが失態を見せたとか何とか、やたらと気にしている。

普通、隣であれだけ言われたら、バリーの方も落ち込みそうなものだが、全く気にした様子なかった。そのくらいの図太さがなければ、ガスを精霊にはしとけないのだろう。

「そうは言ってもなあ。前も結構危ない橋を渡ったんだぜ」

ジャックはアルダを危険に晒したくないのだろう。

それしかないとわかっていても、かなりの渋面を見せていた。

前回はアルダの負担も大きく、危険も感じただろうから、仕方のないことではある。

出発前は一番威勢がよかったのに、今では一番の慎重派になっていた。

「今度はあまり奥に行かずにやればいいじゃない。あの草原を片付けられただけなら、手前側からでも可能でしょ。そうすれば前回みたいな危険もないわよ」

「まあ、風向きもあるから、そんな手前から使えるわけじゃないけどね。それでも前回よりは格段に楽なはずさ。それほど危ないことはないよ」

アニーとルーファウスがアルダの背中を押す。

「よし、それでいくか」

そのアルダの一言で、前回と同じく、草原の方にも魔法で先制攻撃を行うことになった。

そうでもしなければ消耗が激しすぎて、作戦が進められないのだから仕方がない。

「だけど、またアルダを危険に晒すのはうまくねえな。次はお前たち二人でやってきたらどうだ。

今度はそんな遠くねえし、すぐその原っぱに魔法を撃つてくりゃいいだけだから、二人つきりでもなんとかなるだろう」

ガスの言葉に、俺とルーファウスは顔を見合わせる。

確かにふたりきりなら、俺は気兼ねなく魔法を使うことができる。

俺たちは頷き合ってから、それで構わないと応じた。

「風も出てきたし、そろそろ出発するか」

昨日の作戦から一晩経って、やっと日が昇ってきた頃である。

すっかり睡眠をとっているので、マナも完全に回復している。

「本当にアンタたちだけでどうにかなるわけ。アンタがワープゲートを開いてる間は、誰に援護してもらうのよ。ルーファウスは剣が使えないのよ」

「俺は魔法を瞬間的に使えるから、べつに平気だよ」

「アニーよ。心配は無用である。我々に任せておけば何の心配もない。私が空から目を光らせておくのだからな。不意を突かれることなどないのだ」

そう言ったのは、安請け合いをすることでお馴染みのルースベルト——鳥の姿をしたルーファウスの精霊——だ。

今は鳥目で空を飛べないから、ルーファウスの肩に留まっている。

「でも、こんなに視界が悪いんじゃない、空からだつてよく見えないだろうし、ワープゲートに頼った

移動はできないんじゃないの」

「大丈夫だつて、それにほら……」

俺は声を潜めて、例の力も使い放題だと説明した。

俺は安心させようと思って言っただけなのだが、アニーは目を吊り上げた。

「待ちなさいよ。こんな近くで、そんな大きな炎が上がつたらバレるわよ」

俺の耳をすごい力で引つ張りながら、同じく声を潜めたアニーが言った。

確かに火柱でも上がれば、野営地から見えてしまうかもしれない。

今回は、なるべくルシファフレアを使わない方がいいだろう。

「できるだけ広い範囲に魔法をばらまいてきてくれ。道中の敵だけを排除したんじゃない、他のところにいるやつらが戦いの音で集まってきて、あつという間に包囲されてしまうからな」

見送りに出てきたアルダが言った。

「大丈夫ですよ。僕の魔法はそんな狭い範囲だけを狙えるほど器用なものじゃないですから。この辺り一帯が綺麗になるはずです。少し風が弱いですけど、その方が変に敵が残らなくていいでしょう。あまり風が強いと効果が落ちますからね」

作戦前でも、ルーファウスはいつもと変わらない様子である。

見送りに出ていたアニーとアルダを残し、俺たちは野営地の外にある坂を下った。

見張りの兵士が立っている林を抜けると、昨日、酷い目に遭わされた草原が遠くに見えた。しばらくして草薙に入り、背の高い草に覆われて視界が悪くなる。

「カエデ、そろそろ敵が出てもおかしくないよ」

「ああ、さつそく前方に二体いるな。大したことないから静かに倒して、まっすぐに進もう」草を刀で斬り払いながら進んでいると、すぐに二体のコカトリスが現れた。

俺はあまり大きな音を立てないように飛び出し、一振りで二体とも倒す。

炎をまとった羽がルーファウスの方の上に落ちたが、本人は気がついてもない様子である。

この貴族出の男は一体どんな高級装備を着ているのか、コカトリスの羽くらいでは焦げ跡すらつかない。

「風が横から吹いてくるね。少し風上を目指そう」

「それじゃ、この窪地を伝っていくか。一番敵が少なそうだ。それにしても、視界が悪くてどこにいるかもわからなくなりそうだな」

「ルーズベルトが空から見ているから大丈夫さ。位置取りが悪くなれば、降りてきて教えてくれるはずだからね」

今はもう日も昇りきっているので、ルーズベルトは空を旋回していた。

青空が広がっており、任せておいて安心だろう。

そのまま草に覆われた窪地を進んでいると、周りで急に魔物の気配が増えた。

下手に魔法で倒せば、音に引かれて集まってきたかねない。

視界が悪いので、ワープゲートを使って通り抜けるのも難しかった。

「敵が多いな。背を低くしてすり抜けるぞ。見つかるなよ」

「オーケー」

俺はなるべく音を立てないように、中腰の姿勢になり、早歩きくらいのスピードを保った。

敵の間を縫うように移動して、どうしても倒さざるをえないのだけ、すみやかに始末する。

しかし、音を立てないように倒すには、オーラの出力を上げる必要がある。

あまり効率のよくない倒し方だった。

中腰で歩くのが辛くなってくる頃、急に視界がひらけたかと思うと、ゴツゴツした岩山に突き当たった。

「もういいんじゃないか。だいぶん進んだはずだぞ」

「まだまだだよ。あそこに見えている大きな木が、僕たちが草むらに入ったところだから、直線距離にしたら大して離れてないね。それに、ここじゃ風が弱すぎて全然ダメさ。せめて、この岩山を回りこまない」と

確かに低地に入り込んでしまったのか、風がほとんど吹かなくなってしまった。

仕方なく俺は、岩山に沿って駆けた。

岩山ほどではないにしても足場が悪いのに、ルーファウスは難なくついてくる。

視界を遮るものがなくなってしまったために、岩山にいる魔物が飛び降りるようにして何度か襲いかかってきた。

そのせいで前方に対する注意が散漫になり、俺は大きなミスをやらかしてしまう。

進行方向に丸っこい石がいくつも点在しているなどと思ったら、それはウエアウルフの群れだった。エリアセンスには引っかけかかっていたし、おかしいなとは思っていたのに、動きがなかったの見過ごしてしまった。

ウエアウルフの群れはいきなり起き上がって、俺たちめがけて走ってくる。

「やばいことになった。走り抜けるぞ」

後ろのルーファウスにそう伝えて、俺はウエアウルフの群れに正面から斬り込んだ。

最初の接触で斬れたのは三匹で、残りは素早い方向転換で俺の刀から逃れた。

厄介な相手だと思っていたら、後ろからとんでもない数の氷の槍が飛んできて狼をとらえた。

俺の方に気を取られていたウエアウルフは、六匹ほどが致命傷を負って地面に倒れた。

それでも手負いを含めてまだ十数匹が残っている。

また魔法を使おうとするルーファウスを手で制して、俺はアメリアのホーンフロストを真似た魔

法で地面を凍らせた。

ウエアウルフの足を凍りつかせたが、そんなに長い足止めにはならないだろう。

俺はルーファウスのローブを掴むと、オーラの出力を上げて全力疾走する。俺に引きずられた形のルーファウスが、風の抵抗を受けてバタバタとはたいているが気にせず走った。

「はあはあ、ルーファウス、お前、あんなに、魔法を、使って大丈夫なのか……」

「あの場合には仕方ないじゃないか。でも、あれくらいなら大したことはないよ」

「俺は今の、かなり魔力を使っちゃったぞ。またマナが尽きて、こんな場所で一晩明かすなんてごめんだからな」

「大丈夫だよ。ほら、あそこならちようどよきそうじゃないか」

ルーファウスの指差す方を見てみると、谷風が丘の斜面に生えた草を綺麗に揺らして波を作っている。丘の斜面を駆け上がるように、風が吹いているのがよくわかった。そして中心には大きな岩がある。あの岩の上からなら、安全に魔法を展開できそうだ。

「あの丘の下にある岩まで行くのか」

「僕がワープゲートを開こう。開いたらすぐにくぐって、向こう側の安全を確保してくれ」

俺がわかったと答えると、ルーファウスはルーズベルトを呼び寄せてから、ワープゲートの魔法を発動させた。

ここまで、俺はかなりの魔力を使ってしまったている。

それでも帰りの分くらいは残っているだろう。

俺はゲートが開くと同時にくぐって、すぐにエリアセンスを展開させた。

蜘蛛くものような魔物とカニのような魔物が近場で数体引っかかる。

ワープゲートはいつまでも開いていられないので、俺は大急ぎで魔物の方へと駆けた。

まずは蜘蛛くも型の三体を倒すことにした。

不意をつくように一体を倒したら、いきなり残りの二体がすごい速さで逃げ出した。

しかたなく片方を追いかけてケツに斬りかかり、もう一方にはファイアーボールを二発動時に放って倒した。

そうしたら、爆発音に引き寄せられて他の魔物までこちらに向かって動き出した。

コカトリスが四体ほど突出してきたので、反射的に斬り捨てる。

そして、続いて十体ほどで現れたインプを蹴ったり、斬り倒しながら、さらにディアウルフを同時に相手した。

ディアウルフは隙すきを突いて、なんとか地面に転がすことができた。

最初に引っかかったカニは動きが遅かったので、最後に正面からクラウソナスで叩たたき斬った。

俺はゲートに引き返して、ルーファウスを呼んだ。

「おい、片付けたぞ……」

自分でも声が疲れているのがわかる。一方のルーファウスは悠々とワープゲートをくぐってきた。

「ここなら野営地にも被害は出ないだろうし完璧だよ。早速始めようか」

「俺はまた、かなりの魔力を使っちゃったぞ。下手すりゃ帰る途中で動けなくなるかもな」

「岩場まではワープゲートが使えるし、大したことはないさ。帰りは僕も魔法が使えるしね」

それじゃとっと始めてくれと言って、俺はこの岩にある日陰を探して座り込んだ。

後にして思えば、それがよくなかった。

ルーファウスは谷風を受けると真ん中に、バニシングガスの煙を焚たいた。

ピンク色の煙が風に煽あおられて俺たちの方に向かってきそうになったので、俺は焦あせって風魔法を展開し煽あおり返した。

この状況にはルーファウスも滝のような汗を流していたので、相当にやばかったものと思われる。ここで緊張と緩和を繰り返した俺の精神は、疲弊ひびしきってしまった。

そのため、座り込んで、何も考えられないまま、ルーファウスの魔法を眺めていた。

ルーファウスは岩の上から、下を見下ろし、ピンク色の煙を延々と発生させ続けている。

魔法の威力は凄まじく、草や木の葉が一瞬にして液化するほど強力な煙が、丘の斜面を撫なで上がるように広がっていった。

俺が、自然破壊だなあ、環境によくないなあ、なんて考えていたら、魔物の咆哮が次々に響き渡り、朽ちた藪の中でめちゃくちゃに暴れまわっているのが見えた。

煙がやばいことはわかるのだろうが、風に煽られる煙の速度は速く、大半の魔物は逃げきれないようだった。

——しかし、風向きの関係で煙を逃れたやつらもいる。そいつらは一斉にこちらをめがけて殺到した。

白銀に輝く衣装をまとうルーファウスは、さぞ目立つことだろう。

魔法から逃れた魔物が、攻撃の対象とするにはこれしかないというくらいだ。

俺は一気に眠気も吹っ飛んで跳ね起きた。

「大量の魔物が向かってくるぞ！」

「悪いけど、僕は両手がふさがっているから、カエデが倒してくれないか」

ルーファウスはそんなことに構ってられないといった態度である。

今日、気がついたことなのだが、俺は消費の大きい強力な魔法でしか、戦う術がない。

クロエのように蹴りででも倒せればいいのだが、体術の心得がないため難しい。

つまり俺は、こういう状況になると、アルダよりも長く戦うことができないのだ。

敵は団子状に入り乱れるほどの密度で、この岩へ登ってこようとしている。

いつそのこと、ルシファフレアを使いたいが、熱に煽られたバニシングガスがどうなるかわかったものではないから無理だ。

ルーシの力を借りようとも考えるが、逆に魔力の消費が多くなるだけだろう。

そんな状況でも、ルーファウスは魔法を解除する気がないようだった。

仕方がないので、俺は引きぬいた刀を手にも、覚悟を決めて敵の真只中に飛び込んだ。

刀が折れたりしたら困るので、いつも通りクラウソナスを発動させる。

第一陣は、足の速いコカトリスの群れからだった——

それから、一時間は戦っただろうか。

最後の一匹である、空中を漂うゲイザーを串刺しにして、戦いは終わった。

途中からはルーファウスも加勢してくれたが、俺はマナを使い果たしてしまった。

「カエデ、さあ帰ろう」

「俺はもうマナが残ってない。今日はここで野宿した方がいいんじゃないか。敵が出たらマジで死ぬぞ」

「来る途中で通った岩山まで僕がワープゲートを開くよ。そのくらいのマナなら残っているんだ。そこからなら、直線距離は大したことがないし、叫べば応援くらい寄越してくれるさ」

まあそれならいいかと、俺はルーファウスの開いたゲートをくぐった。
今はもうエリアセンスを展開するだけでも重労働に感じられる。

危険がないと告げると、ルーファウスもゲートをくぐった。

それで岩山を二人でトボトボ歩いていたら、行きにもやった感知ミスをもう一度犯してしまう。

俺とルーファウスは、ウエアウルフの群れに追われながら野営地を目指すことになった。

戦う力はないし、助けなんて呼んでる暇もなく、俺たちは走るしかない。

ケツを嫌というほど噛まれつつ、命まで奪わないでくれと祈りながら走った。

ルーファウスも、体中に狼をぶら下げて走っている。

野営地の近くで剣を振るっていたバリーを見つけ、その背後に回ったところで、俺たちは倒れ込んだ――

4

「よう、起きたかい。なんだって狼にケツなんか食わせてやったんだ。ちよつくら話してみな。今は誰かの泣き言でも聞きてえ気分なのよ」

「マナを使い果たしてただけだよ」

「そりゃ、もうちつと頭を使つて戦うことだな。狼にケツを差し出したなんて話は、作戦が成功した話よりも早く広まるもんだぜ。せつかく生きて帰ったつてのに、格好がつかねえだろ」

ベッドの上で目を覚ました俺に、最初に声をかけてきたのは、犬の姿をした精霊のガスだった。

テントの支柱によりかかり、優雅に俺を見上げている。

骨が見えそうなほどケツをポロポロにした俺たちは、バリーに保護され、この野営地まで運ばれて治療を受けたそうである。

そのまま各々のテントに転がされて、朝になって目を覚ましたというわけだ。

それでガスは、俺が起きるまでそばにいろと命じられたそうである。

「冗談じゃねえよ。俺だってお前らが連れてきた狼に食われかけたんだ。どうして俺が見張りなんかしなきゃいけないんだ。おめえらの血の味に、あの狼どもは猛り狂ってたぜ。おかしいだろ。おめえもそうは思わねえか」

「どうだろうね」

「毎度、驚かされるな。それで作戦の方は上手くいったのか。失敗したとなりや、今後の作戦はえらい手間になる。どうなった」

「上手くいったさ。ちよつと倒しきれなかったのに襲われたただだよ。それも全部倒してきたから、

だいぶ楽に進めるようになったはずなんだ。それで、今日も討伐に行くのかな」

「ああ、そういう手はずになってる。おめえもさっさと用意しな。みんなとつくに起きてるんだ」
それだけ言い残して、ガスはテントから出ていった。

昨日、あれだけボロボロになったというのに、また今日も朝からこき使われるのかと思うと、ガスではないが愚痴の一つも言いたくなった。

治しておいたから働けなんて、ロボットにでもなったような気分だ。

そんなことを考えていたら、アニーがやってきた。

「あら、無事に目が覚めたみたいだね。さっさと用意しなさいよ。今日も作戦があるのよ。ほら、さっさと立って——、きゃあっ！」

アニーによって無理やり立たされたら、俺のズボンに大きな穴が開いていたことが判明した。

血だらけで、尻の部分がまるきりなくなっている。

昨日のウエアウルフから受けた傷が、どれほど壮絶なものだったのかを物語っていた。

「さ、さっさと着替えなさいよ。みんなもう用意を始めてるのよ」

少し早口になんて言ってる、アニーはそそくさと俺のテントから出ていった。

俺は魔法の空間である「ボール」から取り出した替えの服に着替え、まだ血が付いたままになっている装備を軽く拭いてから身に着けた。そしてテントから出て、今日の段取りを聞いておこうと

アルダを探す。

アルダは自分のテントで剣の手入れをしていた。

「ついさっき偵察に出していた隊から連絡が入ったぞ。上手く敵を排除できたようだな。助かるよ。これで随分楽に作戦が進められるようになった。それにしても、お前がそこまで苦戦するような敵が、この近くにいたのか」

「いやあ、俺はちよつと小物を倒すのが苦手なようなんです。消費の少ない魔法がないんですよ。それでルーファウスのやつが、小物を山のように集めたんで……」

俺の言葉に、アルダはなるほどなど笑ったが、命を落としかけた俺にしてみれば笑い話ではない。狼にケツを食われながら走った恐怖は、まだ俺の心を苛んでいる。

「それで今日はどうするんですか」

「今日は次の野営候補地まで進むことになった。偵察で安全そうな高台を確認できたし、そこからなら三日ほどの行軍で、一気にカースイユの砦を目指せる。今日は、そこまでの道のりと新しい野営地の周りを掃除するぞ」

しばらくして準備が整い、目的地に向けて出発の号令がかかった。

こうしてまた俺を最後尾に据えた陣形で、次の野営地を目指す討伐作戦が開始される。

隣では例のごとく、暇そうなアニーが歩いていた。

俺は適当に後方を警戒しながら、アニーの無駄話に付き合う。

「ルーファウスの魔法がなかったら、この作戦も、もっと酷いものになっていたわよね。あいつに感謝する日が来るなんて思いもしなかったわ。アンタはそういう魔法が使えないわけ？」

「あそこまで広範囲の魔法はないな。俺は迷宮探索に必要な魔法を覚えただけだから、それ以外の魔法は知りもしないんだ。だから、それらをやりくりして、なんとか戦ってるんだよ」

「迷宮かあ。私も一度は行ってみたいのよね。魔法も実戦で覚えなきゃ意味がないでしょ。それに、いいお小遣い稼かせぎにもなりそうじゃない」

「どうだろうな。魔法は発動に時間がかかるし、危険を減らすためにも、剣を使える相方でもないなきゃ迷宮は無理だぞ。だけど、兵士連中は迷宮なんてこりごりだろうし、相方を見つけるのは難しいんじゃないか」

「ルーファウスは一人で迷宮に入っていたっていうじゃないの。なんであいつにはできて、私にはできないと決めつけてるのよ」

「あいつは詠唱時間キヤブの短い初級魔法を連続で使えるだろ。あれは、なかなか迷宮向きの能力だぞ。

昨日もアイスランスを同時に三十本ぐらい出してたけど、あのくらいじゃなきゃ、魔法使いが一人で迷宮に入るなんて、とても無理だろうな」

「じゃあ、練習も兼ねて、次の敵は私に倒させなさいよ。アンタが時間稼かせぎ役をやるの」

「今相手にしているのは、低層に出てくるような雑魚ざぎじゃないんだぞ。覚えてた魔法で削り切るわけがない。どうせ初級魔法くらいしか使えないんだろ」

「へー、そうなの。残念ね」

アニーはかなりの話好きだ。

おしゃべりで時間を潰つぶすことに慣れているというべきか、とにかく話が途切れない。

この世界には、おしゃべりくらいしか暇を潰つぶす方法がないからだろう。

「ところでアンタ、結婚したっていうのに、シャノンの相手をしてあげてないでしょ。相当、溜たまつてるみたいよ。おかげでアタ——いえ、なんでもないわ」

俺は急にアニーの話が途切れたのに興味を惹ひかれて、そちらを向いた。

よく見れば、アニーはほんのりと頬ほおを赤くしている。

「なんだよ。お前がどうしたんだ」

「な、なんでもないわよ。それよりアンタが相手をしてあげたらどうなの」

「そんなことできるわけないだろ。あれは形だけの結婚だから、手なんか出したらアメリカに殺される」

「そうは言っても、シャノンの部屋には顧問官のじい様連中くらいしか近づけないのよ。アンタが相手してやらなかったら、いくらなんでもシャノンが可哀想だわ。きっと、アメリカたちもわかっ

てくれるわよ」

「つまり、男に飢えたシャノンのは、あろうことかお前に手を出したってことだな!？」

「なっ! なにを急に食いついてきてるのよ。そんなこと私は一言も言っていないわよ」

俺は色々聞き出そうとしたが、アニーの口は固く、終いには何もしゃべらなくなった。

「なあ、次の敵は俺が時間稼ぎしやるから倒してみろよ」

「機嫌を取ろうって魂胆が見え見えなのよ。この出歯亀野郎! 本当に嫌らしいわね」

「そ、そんなじゃないって」

その後、俺は機嫌を取ろうと、後ろからやってきたゲイザー相手に時間稼ぎをして、魔法の練習に付き合ったのだが、アニーは俺の後頭部にアイスランスをぶち当てるような腕前だった。

練習相手が俺じゃなかったら、確実に死んでいただろう。

よくこれで迷宮に行きたいなどと言いつけたものだ。

そもそも兵士になるために迷宮で腕を上げるのが普通なのに、武官にまでなったアニーが迷宮などに潜りたがるのは道楽以外の何物でもない。

「迷宮に潜る以外の趣味を見つけた方がいいな」

という俺の的確なアドバイスに対して、アニーは激昂して拗ねてしまった。

なので、俺は再び機嫌取りのためにファイアーボールの魔法を教えてやることにした。

その日は前線から怪我をした兵士が送られてくることもなかったところを見ると、スムーズに作戦が進んだようだ。

5

「実際、サイコパスの魔法は大したもんだよ。道程の半分は終わったようなもんだからな。褒美でもくれてやりてえが、あいにく持ち合わせがねえ。惜しかったな」

アルダの肩の上で、ネズミのジャックが満足げに言った。

大した怪我人も出さずに、ようやくともに魔物と戦うことができるようになったので、それがご機嫌の理由であるらしい。

「明日は野営地回りを掃討する。しかし、そこからカースイユまでは何もありません。すぐな街道が通っている。その道をどう攻略するかが肝心だな。完全に掃討するのはカースイユ砦に着いてからでもいいが、とりあえずたどり着かないと、物資を届けることもできないからな」

アルダがみんなに言った。

「またルーファウスの魔法でやりやいいじゃないか」

バリーの意見に、ルーファウスは首を横に振った。

「平地だと風が散りすぎて無理だね。そこまで万能な魔法じゃないよ」

「それに風向きによつては、こちらが全滅しかねない。確か、あの辺りは海からの風が吹いていたはずだから、完全な逆風になる。もう同じ手は使えないだろう。ただ、あとはワープゲートを繋げる場所までたどり着けばいいだけだ。カースイユの平原は、先頭に精鋭を集めてくさび形陣形で突撃したついで」

アルダの意見に、アニーが反論する。

「それだと帰り道が心配じゃないですか。物資を届けて終わりじゃないんですよ」

「ここまで掃討が進んでいれば、帰りくらいは戦えるさ」

「でも、平地は敵が集まってきて危ないって話じゃないですか。カースイユ砦の近くは、丈の高い草も生えてないですよ。それに、カースイユ砦に近づくほど敵も強くなっています」

なおも反論するアニーに、バリーが言った。

「だけど、力押しで行く以外に取れる手はないんじゃないか」

「まあ、詳しい話は現地を見てからだろうよ。まだカースイユの砦が残っているといいがな」そのガスの一言で、誰も言葉を発しなくなった。

確かに、連絡が取れなくなって半月は経っているのだから、最悪の状況も考えられる。

食べ物だって、そんなに蓄えがあったはずがないのだ。

しかしそうすると、俺がエドに『グ』の魔法で呼ばれていないことに疑問が残る。

もしそんな状態なら、もつと前にエドは必ず俺を召喚したはずなのだ。

「とりあえず、明日は新しい野営地回りの討伐だけして、砦の方に偵察でも出してみたらどうですか。暗殺部隊の奴らは思った以上に使えますよ。現地の状況がわかれば作戦を立てられるようになるし、砦が落ちてるとしたら討伐作戦ではなく、王都での防衛作戦が必要になります」

そう言いつつも、俺には砦が落ちていないという確信に近い思いがあった。

なので王都での防衛作戦というのは、ただ大げさに表現してみただけだ。

「ちよつと、ふたりとも不吉な話はやめて！ そんなことになってるわけじゃない。向こうには隊長たちだってたくさんいるのよ。そんなことになってるはずがないわ」

俺の言葉に過剰に反応したのはアニーだった。

確かに、アニーは知り合いが向こうにたくさんいるから心配なのだろう。

「そんなに心配するなって。きっと砦は大丈夫だよ。かなりの確率でな」

「砦が落ちてくるかもしれない、なんて言い出したのは自分じゃない。なによ、もう……」俺の慰めに、アニーはうつむいて肩を震わせはじめる。

どうやら本当に俺の発言に傷ついているらしい。

ちよつと無神経な発言だったかと反省した。

話自体はそれで終わって、会議はお開きとなった。

その後で、俺はアニーのテントに顔を出した。

「夜更けに女性のテントに入り込むなんて、どんな神経をしているのかしらね」

いきなり嫌味を言われたが、こいつの発言をいちいち気にしていたら近づくこともできない。

「慰めになるかわからないけど、俺がノグの魔法で呼ばれていないんだ。それほど深刻な事態にはなっていないと思うぜ。ほら、エドが使える召喚魔法だよ」

「あんな子供、真つ先に魔物に狙われたって不思議じゃないわ」

「おい、縁起でもないことを言うな。魔法一つ唱えるくらいの時間はあるに決まってるだろ。だから、砦は落ちてないと思うぜ」

「あら、そう。どちらにしろ明日にはわかることでしょ。それよりも私は、もう少しで着替えるところだったのよ。どんだけ無神経に人のテントに入ってくるのよ」

「なあ」

俺はちよつと改まった態度で話しかけた。

「なによ」

「それで、シャノンはどうなふうにお前を誘ったんだ。押し倒されたのか。それとも、合意してか

ら—————いってえ！」

そこまで口にした俺は、アニーにぶん殴られた。

そして容赦のない力で耳を引つ張られて、テントから追い出されそうになる。

「なあ、どこまでヤツたのかだけでいいから教えてくれよ。気になって眠れないんだよ。お前はそれで、まんざらでもなかったのか。どうなんだ」

「死ね」

凍りついたように冷たい声でアニーが吐き捨てた。

どうして、話すくらいのことをケチるのだろうか。

それくらい教えてくれてもいいではないか。

なおも追いつがろうとしたら、棒のようなもので殴りかかってきたので、仕方なく俺はその場から退散した。

その日は、そのことが気になって本当に寝つけなかった。

一晩明けて、また魔物の討伐が始まった。

本日は草薙を抜けた先にある、丘の上の野営予定地周辺を討伐する。

朝からテントを畳むと野営地を空き地に戻し、ワープゲートで直接、次の野営地となる丘の手前

に兵士を展開した。

その丘の上までは林が続いているので、そこなら目立つ心配もない。

これ以上カースイユに近づくと、木がなくなるので、野営地を作るにはそこが限界とのことだった。

今日の作戦は丘の周囲を兵で囲み、その包囲の輪を狭めながら丘の上を制圧することである。

なので俺も暇になることはないはずだったのに、アニーの護衛を命じられてしまった。

当のアニーは、自慢のファイアーボールでやる気満々だった。

「おい、本番はもうちょっと先にしておこうぜ。まだお前の魔法は、どつちに飛んでくかわからないだろ。俺ならいいけど、俺以外の奴に当たったら大変なことになるぜ」

「はあ？ 何よそれ。馬鹿にしてるわけ？」

新しい魔法を覚えて浮かれているアニーは、俺の言葉に青筋を立てた。

でも、昨日は散々練習したのに、一度も成功していないのだ。

どうしても、アニーの魔法は飛ばすことが疎かになってしまふ。

俺には、その原因に心当たりがないから矯正のしようがない。

目的の丘はコカトリスが占拠しているだけなので、作戦そのものはそれほど難しくはないのが救いだ。

コカトリスは倒されそうになると炎に包まれた羽を撒き散らすため、兵士たちはなるべく遠距離魔法で倒そうとする。

だから、すぐに氷や火の玉が戦場を飛び交い出した。

兵士たちが魔法を撃ちはじめると、アニーも一緒になって魔法を撃つことにしたようだ。

魔法が飛んでいく方向に味方はいないので、何も言わずにいたら、アニーの放った魔法は丘を越えて、はるか向こうに飛んでいった。

見えてはいないが、丘の向こう側には味方の兵士がいるはずだ。

俺が力づくでもやめさせるべきか考えていると、アニーと目が合った。

俺が気に入らないのか、心配する俺を睨み返してきた。

きっと、何を言っても聞き入れはしないだろう。

当然、魔物の方もただ黙ってやられているわけもなく、こちらに襲いかかってきた。

坂道で勢いをつけて突っ込んできており、もし攻撃を食らえば即死だつてありえる。

アニーは叫び声を上げるだけで動かないので、俺はアニーのロープを引っ張って後ろに庇つてから、コカトリスを両断した。彼女は炎をまとった羽がロープにくっついてまた悲鳴を上げる。仕方なく俺はそれを払ってやった。

この辺りで、自分が足手まといであることに気がついたのか、前に出なくなったため、ようやく

俺は安心した。

そして俺は、他の兵士たちと一緒に一気に丘を駆け上がって制圧する。

丘の上にたどり着くと、反対側を任されていた兵士たちも上がってきた。

その中に、髪の毛をチリチリに焦がして、少し黒ずんだルーファウスが交じっている。

ルーファウスは、あんな魔法を飛ばしてきた下手クソはどこのどいつだと、激怒していた。

魔法が当たったのが魔力の高いルーファウスで本当によかった。それに彼の装備なら、魔法への耐性も高いはずだ。

少し焦げたルーファウスの姿をしつかりとアニーの目に焼きつけさせてから、俺は言った。

「あれくらの被害で済んだのは奇跡だぞ。二度と実戦で魔法は使うなよ」

「わ、わかったわよ。うるさいわね！」

それから丘の上にある木を切り倒し、テントと柵を設置するのに、日没までかかった。

その間、頭をパンチパーマみたいにしたルーファウスは、ずっと機嫌が悪かった。

「これから大事な人と会うつてのに。あの魔法を使った奴は、絶対に見つけ出してやるからな」

そんなルーファウスにアニーが優しくしているのを見て、俺は笑いをこらえるのが大変だった。

普段ならまず見られない光景である。

怒っているルーファウスに周りも気を使っていた。最終的には『似合っている』ということでした。

を収めたようだ。

しかし、マツチ棒みたいになったルーファウスを前にして笑いをこらえるのは、アルダですら不可能だった。また、口の悪い精霊連中に散々馬鹿にされていたから、本人もまさか似合っていると言葉を鵜呑みにしていないだろう。

6

「偵察からの報告で、ここから馬で半日ほど進んだ場所から、カースイユ砦の見張り台が見えたらいい。砦はなんとか持ちこたえているようだ」

アルダの言葉を聞いて、みんなは安堵の表情を見せた。

砦がすでに落ちていたのなら、この作戦自体が無意味なものとなつてるところだった。

「だが、そこまでにいる魔物は、数も強さもこれまでの比ではないそうだ。偵察隊もそれ以上は進めなかったと言っている。一般の兵士たちには荷が重いかもしれないな」

と、アルダは続けた。

「この前の作戦以上に被害が出たら、回復が追いつかなくなりますよ。戦列を維持することすらで

きないですよ。治療しながらの作戦は無理ですから、ここからは時間をかけた方がいいかもしれませんね」

椅子に生えたキノコみたいになっているルーファウスが言った。

しかし、砦と連絡が取れなくなっているから、かなりの時間が経ってしまったている。

「とりあえず小規模な隊を編成して、食料だけでも届けた方がいいんじゃないですかね」

俺がそう意見すると、アニーも俺の意見に賛同した。

「それがいいわ。大人数でやろうとするから目立って敵を引き寄せるのよ。とりあえず向こうに行きさえすれば、帰りはあつちにいる戦力も使えるじゃない。データスにサーリアもいるし、他の隊長たちもいるはずでしょ。それだけ揃っていれば難しくないわ」

データスは会ったことがあるが、もう一人は知らない。俺はそのことを、隣にいたバリーに聞いてみる。

「精霊魔法に長けた魔術師だな。かなりの腕前で、ルーファウスと同じくらい魔法が使える」

そういえば、オズワルド辺境伯のもとには各地から隊長たちが集まっており、こちらよりも戦力を持っているはずなのだ。

ならば近くまで行って合図を送りさえすれば、合流することもできるのではないだろうか。

「だけどう。向こうにいる奴らが戦える状態なのかかわからないぜ。砦から出られなくなっている奴

も経つてるんだろ。食料もとくに尽きてるはずだから、干上がってる可能性もある。なにせ小さな砦だから。栄養失調になつてるような奴らに戦えなんて言つたって、立ち上がれるかどうかとも怪しいもんだ」

みんなの楽観視に釘を刺すようなことを言つたのはジャックだった。

だが、本当に干上がっているなら、どうやって砦を守っているのか不思議である。

あんな目立つ砦なら、魔物が休みなく群がっているのではないだろうか。

「とりあえず、隊長の俺たちだけで行ってみるのがいいのかもな。それ以上増やしても目立つだけだし。俺とアルダとカエデが、剣を使って戦えば、目立たずに済むだろ。それで、ルーファウスがワープゲートを繋げられる距離まで近づけば、食料だって届けられる。そうやって向こうの状況を確認してから、その後どうするか考えりゃいい」

バリーも少人数で行つてみることに賛成のようだ。

「それでいいんじゃないですかね。この野営地にも、しばらくの間は兵力を置いておかないと潰されかねないし、兵士はここに残しておいた方がいいと思いますよ」

と、俺がだめ押しをする。

「では、それでいい。アニーはここに残つて兵士たちを指揮してくれ。バリー、ルーファウス、カエデはこれから出発だ。それと道案内のために、偵察に出していた奴を一人だけ連れていく。す

ぐに出るから、それぞれ異空間の中に、届けるための水と食料を詰め込んでおいてくれ」
こうして俺たち四人と暗殺部隊から出されたケイという男の、合わせて五人でカースイユの砦^{とりで}に食料を届けることが決まった。

このメンツなら難しくはないだろうと、高をくくっていた部分があつたかもしれない。
ほとんど満場一致で決まったが、実のところそんなに長く戦うことができないメンバーである。

敵をなるべく避けるため、街道は使わずに遠回りするつもりだった。どうしても動きが取りづら
いときは、俺がワープゲートを開くことになっている。

日上がりきつた頃に、俺たちは野営地を出た。

百メートルも進まないうちに五匹のコカトリスが現れるが、羽を散らす隙^{すき}も与えないほどの素早
さで、アルダがすべての首を斬り落とした。

足の関節だけを電撃で焼き、まるでコカトリスの方からアルダの剣に吸い込まれるように倒れ込
んできているようだった。

俺のような力に任せた戦い方とは違って、いつも通りの鮮^{あざ}やかな手際だ。

電流がかなり大きな音なので、そこだけちょっと難がある。

神経を使いそうな戦い方であるが、アルダにとってはなんでもないことらしい。

ただ、逆に弱点を持たない敵にはアルダは苦戦してしまうので、次に出てきたディアウルフはバ
リーに行かせて倒させていた。

バリーの剣なら、毛皮が硬いディアウルフでさえ力まかせに両断できる。

それに、アルダが関節を焼いて動きを抑えているので、これといった反撃はない。

アルダは、さらに次の敵を求めて走っていきこうとするバリーの首根っこを掴まえて止めると、先
頭に立って警戒しながら進みはじめる。

これなら二人に任せておいて安心だろう。

バリーの使い方をアルダはよくわかっている。

俺はエリアセンスに集中しながら最後尾を歩いた。

一番後ろで楽しんでいるわけではなく、一番危険だからこそ俺が割り当てられているのである。

しかし、横合いや後ろからくる敵の気配は今のところ感知していない。

みんなでぞろぞろ歩いていると、なんとなく迷宮にいた頃を思い出して、こういうのも楽しいな
と思っていたら、ケイが止まってくれと小さく言った。

「この先で、俺たちは見たことのない敵を見つけている。戦うのは危険と判断して迂回^{うかい}した。だか
ら、どのくらいの強さなのかわからない。ここから先の窪地^{くぼち}は迂回^{うかい}した方がいいだろう」

「時間が惜^おしいな。カエデ、ちょっと倒せないか見てきてくれ」

「待て。俺たちの隊が全員で倒せないと判断したんだ。こんな人数で倒せるわけがない」
「そうとは限らないだろ。ちよつと見てきますよ」

俺はそう言い残して、窪地の中に飛び込んだ。

やはりそうかと、遠くに目当ての敵を見つけた。

迷宮の地下二十階よりも下にいる、歩くザリガニのような形をした名もなき魔物だ。

人型の魔物と言えなくもない姿で、知能も高い。

こういう大物を相手にする方が、小物多数を相手にするより俺にとっては楽だ。

まずロアフレ임을を放ち、その後ろを全力で追いかけて敵に近づいたのち、ロアフレ임の陰から飛び出すようにして斬りかかる。

敵は俺の魔法を大きなハサミで受け止めたので、その隙に、胴体めがけてクラウドソナスを乗せた刀を放った。

確かな手応えを感じて、俺は距離を取って刀を収める。

敵は崩れ落ちながらも、最後のあがきとばかりに、魔力によって創り出された氷の塊を飛ばしてきたが、それは俺に触れたところで消えてなくなった。魔法を無力化したのだ。

俺が口笛を吹いてアルダたちに合図をすると、四人が顔を出して崖を降りてきた。

魔物が落とした魔石の塊を見て、ケイが目を白黒させている。

冒険者ギルドですら百年単位で記録がなかったサイズだから、驚くのも無理はない。

「これで近道ができる。それに、暗殺部隊に対してもいい牽制になったな。なにを考えているのかわからない奴らだから、ちゃんと力を見せておかないと裏切らないとも限らない」

アルダが俺に向かって似合わないウインクをする。

なるほど、そういう理由もあつて俺に倒させたのか。

「お手柄じゃねえか。これで遠回りする面倒が省けたな。さつさと進もうや」

ガスに促され、俺たちはまた草原の谷間を縫うように進んだ。

遠くからだと平坦に見えた草原も、全くのたいらというわけではない。なだらかではあるが、小さな山や谷がいくつも細かく折り重なっている。

野営地を出て四時間ほど経過したが、いまだに目的地は見えてこない。

ほとんど小走りペースで進んでいるが、ルーファウスもケイも息は上がっていないかった。

しかし戦いながら進んでいるので、アルダとバリーは肩で息をしつつ大量の汗を流している。

そこに、巨大な力二のような形をしたオームという魔物が現れた。

これは、アルダやバリーが全快だったとしても厳しい相手だ。

「俺がやりますよ」

そう言い残して俺は前に駆け出すと、敵の上へ飛び、背中の甲羅を斬り裂いた。

敵の実体力が高く、クラウドソナスだけでは心もとないので、刀に振動も加えている。

開いた甲羅の中に冷気を発生させて凍りつかせてから、再び上に飛んで着地の勢いで胴体を二つに折った。

倒し終わったところで、もう一体のオームが地面の穴から飛び出してくる。

あまりマナを使うわけにもいかないので、もう一体は上に飛び乗ると、刀の先にだけクラウドソナスを発生させて、敵の背中に刀を突き立てた。

カニの化物は大きなハサミを振り回して抵抗するが、その動きはエリアセンスによって把握できるので当たることはない。

そのまま刀の先に魔力を集めて、ファイアーボールの魔法を爆発させた。

ゴボンッとくぐもった爆発音とともに、オームの甲羅に亀裂が走った。

そのまま塵となつて崩れ落ち、塵は風に吹かれて飛ばされていった。

こないだのように動けなくなるほど消耗しては困るので、アルダを見習つて魔力をセーブしながら戦つてみたが、上手くいったようだった。

アルダから素晴らしいとお褒めの言葉までいただいた。

「今のは迷宮の最深部にいる魔物だ。剣のたぐいでは、傷すらつかないと聞いたぞ」

ケイが訝しげな顔をしている。

「魔法剣だから、ただの剣じゃない」

ケイは、その言葉だけでは納得しない様子だった。

それを俺は適当な態度でかわす。

一度はブランドンと組んで俺を陥れようとした奴らだから、なんでも教えてやる気にはならなかった。

「それだけの力がありながら、どうして地方の領主などやっているんだ。アルダに代わつて大隊長を務めるべきだろう」

「そんなことには興味がないんだ。それに、俺は参謀長官なんだから、大隊長みたいなもんでもあるだろ」

どんな質問になんと答えても納得しないので、俺はケイの質問に答えるのを切り上げることにした。ちょうどそこで、アルダが休憩しようと言い出したので、ケイから離れた石の上に腰を下ろす。そこにルーファウスがやってきた。

「暗殺部隊といえば、みんなから恐れられた組織だけど、最近では噂ほどでもなくなったのかな」

「どうだろうな。それでも動きだけでわかる。あれは本当に訓練されてるぞ」

「アルダの訓練と大差ないよ」

確かに魔法使いであるルーファウスも、俺たちと同じだけ移動して疲れた様子はない。

「最近じゃアルダは、兵士の訓練をしていたのか」

「していたさ。カエデがあんまり脅かすものだから、必死になって兵士たちを鍛えていたよ。それでもここにいる魔物には太刀打ちできそうにないけどね」

そこにアルダがやってきて言った。

「私が直接カエデから脅かされたわけではないがな。カエデが姫様をこれ以上ないくらい脅かしたものだから、兵士たちの訓練をせよと仰せつかったのさ。城勤めの兵士たちなんて、たるんでいたから、ちよいどいい機会だった」

俺たちはそこで五分ほど休んでから、また小走りで進みはじめた。

この辺りから敵の数が段違いに増えはじめ、とうとうアルダが音を上げた。

「ここからはルーファウスとカエデも魔法で援護をしてくれないか。私たち二人では到底無理だ。それにケイも戦闘に加わってくれないか。戦えないこともないんだろ」

「いいだろう。だがあまり期待するなよ。俺は迷宮では成績がいい方ではなかったんでね」

ケイが頷き、続けてルーファウスが口を開いた。

「僕が魔法を使うと、ワープゲートに使える魔力が減って、それだけ砦に近づかなきゃならなくなりますけど、いいんですかね？」

「いい。狼煙でも上げれば、向こうにいるサーリアあたりがワープゲートを開いてくれるだろう。」

考えてみれば、ワープゲートはこっちで用意する必要などなかったんだ」

アルダにも相当疲れがあるようで、作戦が雑な方向に修正された。

しかし、そうせざるを得ないほど敵の密度が上がっている。

これだけの敵がいる中で、本当にカースイユの砦は持ちこたえているのだろうか。

それから一時間も進まないうちに、五人全員で敵を倒す状況に陥っていた。

まるで群れかと思うような数のディアウルフに行きあつてしまったのだ。

もっと大きく迂回すべきだったが、そのために消費するマナを惜しんだ結果だった。

俺はワープゲートを開いて逃げようとしたが、そんなことを考えているうちに取り囲まれてしまい、戦うしかなかった。

この数で見つからないように移動するなど、どだい無理な話だったのだ。

簡単にバレて、集まってくるスピードも尋常ではなかった。

「おう、こりゃあすげえ数だ。これを倒すのは骨だぞ。それに、俺たちや今日は朝から戦いっぱなしだ。さすがに死んじまうぜ。アルダよ、そうになったら化けて出るからな」

「うるせえ。ガタガタ騒いでんじゃねえ。そんな場合じゃねえんだ、犬畜生は黙ってろ。おめえだって迂回しないことに賛成しただろうが。誰だって疲れてんだよ」

こんな状況でも、いつものごとくガスとジャックが喧嘩を始める。

「いやあ、これ普通に僕らが死ぬ数だと思えますけどね」

ルーファウスが気軽に言うが、確かにこの数は本当に危険である。

ディアウルフは急所がないため、アルダでは倒すのに時間がかかるし、魔法への耐性も高いためルーファウスにも期待できない。

そんな状況を察してか、バリーが前に出たので、俺もその隣に並んで敵を迎え撃つ形をとった。

俺はバリーの死角をかばうように動きながら、なるべく攻撃の瞬間だけクラウソナスを発生させるようにした。

バリーが四体、俺が十体、アルダとケイで二体倒したあたりだろうか。

敵の攻撃を躲かわしきれなかったバリーが、体当たりを食らって吹き飛ばされた。

一緒に飛ばされたガスが地面を転がされて、キャンキンキャンキンと叫さけんでいる。

バリーは足を噛かまれたらしく、ズボンに赤い染みがじわりと広がっていた。

俺とアルダは急いで駆け寄って、バリーに追い討ちしようとするディアウルフを両側から串刺しにしてから、バリーの体を引き起こした。

「悪いが、ここは任せるぞ！」

そう叫さけんだアルダは、バリーを担かぎ上げると、ルーファウスのところまで退避する。

俺は仕方なく、残りの敵を引きつけるために、声を上げながら群れの中に走り込んだ。

一人で倒せる数ではないので、これはルーシに頼るしかない。

「おい、出番だ。半分でいいから手伝ってくれ」

「いいびよ、おでもただがうごらべえ」

俺はポケットの中から汚きたならしいゼリー状の物体をつまみ出すと、それを敵に向かって投げつけた。

ルーシは空中で二本の触手を伸ばし、アーマンブレードを発生させる。クラウソナスよりもコストが重い魔法を二つも同時に発したので、俺のmanaがごっそり持っていかれた。

ルーシに戦わせると、どうしても普段以上にmanaの消費が激しくなるから嫌なのだ。

しかし、触手を振り回して戦うルーシはかなりの戦力になる。

アーマンブレードはすごい斬れ味で、ディアウルフの体は細い触手でなます切りにされている。

細い触手を伸ばして回転させながら、敵を斬る力で上手く空中を漂い戦っていた。

俺も負けじと刀を振り回して応戦する。

ルーシだけに任せていたのでは確実にmanaが枯かわ渇するだろうから、俺の方も必死で倒した。

こうして俺たちは、なんとか残りのディアウルフを始末した。